

# 支援関係における境界と限界設定の意義

——エコシステム構想の技術を中心に——

安井理夫

## 1. はじめに

### (1) 本稿の問題意識

2007年末に、社会福祉士及び介護福祉士法が改定された。そこには、社会における社会福祉士の認知度を高め、その職域を拡大させる施策の展開など、積極的に評価すべき内容も含まれている。しかし、2007年度の社会福祉教育セミナーでは、日本学術会議や社会から認められるための方策が「現場で役に立つ」、「科学的」、「根拠のある」といったキーワードで説明されていたため、今回の改定のポイントは、(a)制度の効果的な運用と、(b)自然科学的発想の2つが、今まで以上に前面に押し出されてきた点にあると考えるのが妥当だと思われる。

筆者は、昨年、博士論文<sup>1)</sup>のなかで、(a)ライフモデルをはじめとして北米で主流とされてきたソーシャルワークのモデルやアプローチには実存的視座が欠落していたこと、(b)わが国においては、社会福祉基礎構造改革や社会福祉士の国家資格化などともなあって、ソーシャルワークが単なるサービス配達の技法や手続きにすぎなくなり、その技術も接客態度と大差のないものに形骸化してきていることについて述べた。前述した2つの論点についていえば、(a)制度の効果的な運用または日本的なソーシャルワークの展開という錦の御旗のもとに、ソーシャルワークがそもそもどのよう

な支援なのかという議論がおろそかにされがちだったこと、(b)自然科学的発想で明らかにされたエビデンスを重視することによって、利用者の主体性や責任性にかかわる実存的視座が非科学的なものとして捨象されつつあること、の2つが、さらに顕著になったと指摘できるだろう。

リーマー (Reamer, F. G.)<sup>2)</sup> を引用するまでもなく、ソーシャルワークは価値にもとづいた支援である。援助者や制度の論理にもとづいたアセスメントや援助過程のマネジメントというアイデアは、ライフモデルにおける「有能な利用者」との協働という支援デザインとは、明らかに整合しない。したがって、このような現状に対して、わが国において、今後もソーシャルワークがソーシャルワークであり続けるためには、実存性に根ざした利用者中心の支援過程の科学化こそが構想されなければならないと思われる。

本稿では、それを、支援場面における限界設定を軸に考察していきたい。限界設定というアイデアは、実存性<sup>3)</sup> と深く結びついたことがらであり、その欠落はソーシャルワークの存立そのものにかかわる問題だと考えられるからである。しかし、筆者が調べた範囲では、わが国の「社会福祉援助技術論」の教科書<sup>4)</sup> のなかに、限界設定についての記述を見つけることはできなかった。このことが、前述した問題を裏づけているとは考えられないだろうか。

## (2) 技術とアート

1960年代以降に登場したライフモデルにおいては、(a)「生活者」というノーマルな利用者理解と、(b)利用者の期待に応えるべく即効性・明晰性・有効性の確立をめざした短期アプローチ群 (インターベンション) とが噛み合っていないことが指摘されている<sup>5)</sup>。したがって、理論的には、この不整合を解決し、利用者中心の支援を実現させていくための技術は、仲介や社会的弁護といった機能や役割に期待されていることになる。

ソーシャルワークにおいて、技術（skill）は、一般に「価値と知識を、実践において矛盾なく適応できる能力」<sup>6)</sup>として理解されている。しかし、どのようにして前述したような矛盾や不整合を解決するのかといういちばん肝心なところが明らかにされていないので、結果的に、ワーカー個人の資質に依存せざるをえない状況が生じている。

ソーシャルワークにおけるアートとは、技法を用いるときの支援者のセンス（感性）の意味で用いられることが多い概念である。秋山薊二は、直接ソーシャルワークを視野に入れたものではないと断りながらも、アートを「経験、思考、エネルギー、目的などによって培われた緻密性、感性、美感を通じて、人間に内在する価値を具体化する創造的産物と行為である」<sup>7)</sup>と定義している。しかし、価値を見つけ出す方法としての感性やセンスを支援者自身が意識化することは、それほど容易な作業ではないと思われる。

これらのことから、科学的な支援を志向することによって、逆に技術においては「勘や経験」<sup>8)</sup>、「感性やセンス」といったブラックボックスを抱えざるをえないというパラドックスを、まず指摘しておきたい。技法の選択も同様である。したがって、技術をブラックボックスとしてではなく、科学的な方法とするためには、技術やアートの科学化が不可欠だと考えられる。

### (3) 支援過程の科学化と実存性

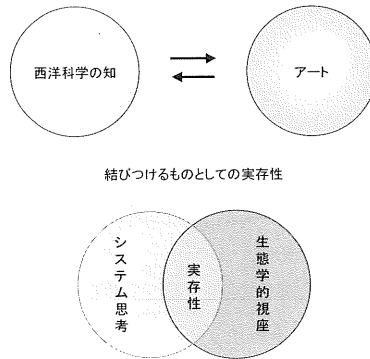
中村雄二郎は、知のタイプには、(a)普遍性・論理性・客観性を特徴とする「西洋科学の知」と、(b)コスモロジー・シンボリズム・パフォーマンスという特性をもった「臨床の知」の2種類があると述べている<sup>9)</sup>。「個々の場所や時間のなかで、対象の多義性を十分考慮に入れながら、それとの交流のなかで事象を捉える方法」<sup>10)</sup>すなわち「臨床の知」によってしかとらえられないリアリティがあるという指摘である。

このアイデアをふまえれば、ライフモデルにおける生態学的視座は臨床の知そのものであり、システム思考や西洋科学の知とは異質なものである。したがって、自然科学的方法によっては、このような異質な「知」はアート（感性）あるいは「勘や経験」としてしか認識できないことになりはしないだろうか。ここに、自然科学的方法のみにこだわった援助論の限界があることを指摘しておきたい。

また、「個別化」、「意味の発見」、「利用者の主体性」などソーシャルワークの価値の多くは、臨床の知として分類すべきだと考えられる。ライフモデルも理論的には利用者中心の支援を志向し、このような価値に深く根ざしていることを考慮すれば、ソーシャルワークの支援過程は、わが国の資格制度で考えられているように、西洋科学の知によってエビデンスを積み重ねていくこと、あるいは、そのような方法で認識されたニーズと社会福祉サービス、あるいは他の専門職とを仲介していくことに、その固有性を求めることは危険だと考えられる。

太田義弘は、利用者それぞれに固有な生活認識を「生活コスモス」と名づけ、「ソーシャルワークの科学性・専門性とは、実存性を原点にした大前提から成り立っている」<sup>11)</sup>と述べている。ティリッヒ (Tillich, P.)によれば、実存性とは、主体的参与に対する責任性を意味するとともに、そのような参与によって主体と客体がともに変化し、そのなかで新しい意味を共有していくような関係性やプロセスを意味している。したがって、本稿では、この実存性を、利用者の主体性と責任性に関心を寄せることによって、システム思考と生態学的視座を結びつける（システム思考によってとらえられた現実と利用者が向かい合い、臨床の知にもとづいた支援関係のなかでその意味を問い返すことによって、自分にふさわしいと実感できるような対処方法を見つけていく）ための鍵概念として考えてみたい（図1を参照）。そして、そこから出発して、ソーシャルワークに固有な技術を構想したとき、支援場面における限界設定がどうしてもはずせない概念で

図1 実存性の意義



(安井理夫 2007年)

あることを明らかにしていきたい。

## 2. 本稿で用いる概念の整理

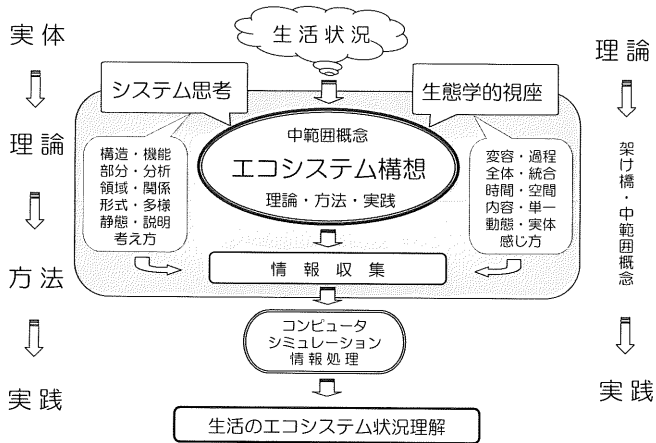
### (1) エコシステム構想と2つの視座

太田は、価値・知識・方策・方法という4つの構成要素からなるジェネラル・ソーシャルワークを基盤として、理論と実践をつなぐための中範囲概念としてエコシステム構想を提唱している（図2を参照）。

この構想では、利用者の生活をつぎの2つの側面から理解しようとする。

- ①システム思考：生活の広がりあるいは空間をシステムという思考方法を用いて、構造的に分析し、その分析した仕組みが相互にかかわり働く関係を、機能として分析<sup>12)</sup>
- ②生態学的視座：生活という営みを、人間と環境とがかかわりあう生きた生活の流れあるいは時間と、それが生み出す、変化や成長の過程として生態学的に理解<sup>13)</sup>

図2 エコシステム構想の概念図

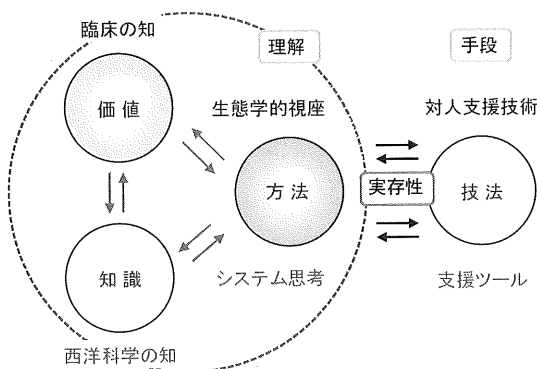


出典 太田義弘『実践・サービス・資源のフィードバックと統合化研究——人間・環境・生活過程の実証考察——』科学研究費補助金研究成果報告書 2006年 33頁

エコシステム構想をもとにして述べれば、ライフモデルにおける理論と実践の乖離とは、「科学的」方法と実存的・現象学的理解とがその関係性を明示されないまま、それぞれ単独で提示されている現状について述べられたものと理解することが可能である。技術についていえば、このようなもともと相容れない2つのものをひとつの原理によって統合しようとしたところに無理があったといえるのではないだろうか。

これまでの議論をふまえると、ソーシャルワークの技術・技法レベルの構成要素の関係は、図3のように構想できるだろう。価値・知識・方法は認識のあり方であり、利用者理解のための枠組みとなっている。エコシステム構想は、支援ツール（システム思考）を媒介とした参加と協働（実存的視座）というアイデアによって、西洋科学の知と臨床の知とが実践過程のなかであらかじめ統合されているという点で、画期的な支援モデルであると考えられる。

図3 技法レベルにおける価値、知識、方法、技法の関係



(安井理夫 2007年)

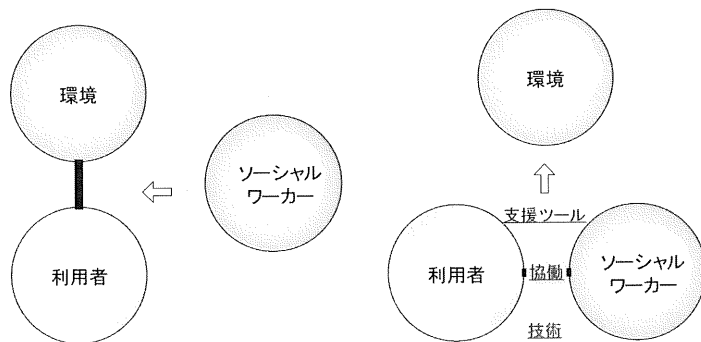
(2) 支援プロセスと限界設定

図4は、ライフモデルとエコシステム構想の支援構造がどのように異なるのかを示したものである。

図4 技術理解の2つのパターン

ライフモデルの技術内容

エコシステム構想にもとづく技術内容



(安井理夫 2006年)

ライフモデルは、一般に「人と環境の相互作用またはインターフェイス

にかかわる」とされている。他方、エコシステム構想においては、支援ツールを介して、利用者と支援者が協働して、環境にかかわっていかうとする。つまり、前者では、「人と環境」が援助の対象とされているため、その内容は操作的（主体と客体）なものになりがちである。後者においては、主体（利用者）と主体（支援者）の関係であるため、どのように協働するのかが焦点になる。つまり、おたがいの主体性を尊重しあった協働のプロセスが支援であり、協働の内容を具体的にすることが、技術の科学化につながると考えられる。

そのために、まず、ソーシャルワークの価値のひとつである個別化について考えてみたい。個別化とは、利用者を主体として尊重すること、すなわち個を絶対化することである。それは、広く社会全体からみれば、おたがいの価値や思想が相対化されることだといえる。このような相対化は、別の言い方をすれば、個人の自律における限界を分かちあうことでもある。ソーシャルワークの目標のひとつである共生社会には、このような相対社会における限界が必ず存在しているはずである。

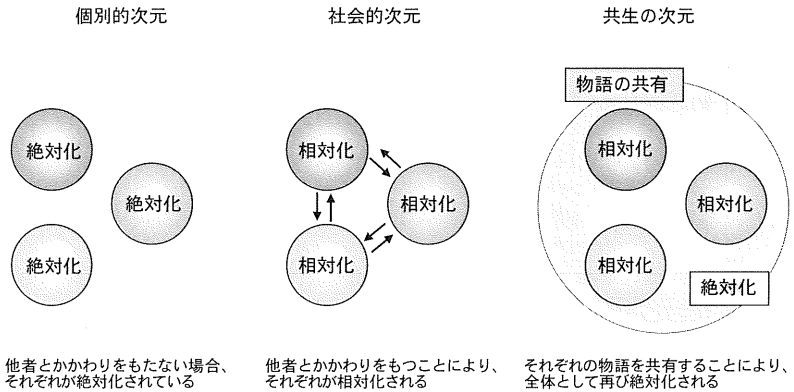
前述した実存性は、相互変容をとまなかつつそれぞれの価値を共有できる関係性を意味しているので、個々の利用者には環境への応答性（責任性）が問われているともいえる。したがって、社会でともに生きるためには、支援のプロセスにおいて、このような限界と向かい合いながら、ひとつのコンテキストに紡いでいく（紡がれた物語を共有というかたちで再び絶対化していく）ための方法が探求されなければならないと考えられる。そのことを説明したものが、図5である。

### (3) アートと体験過程

前述したように、ソーシャルワークにおける支援は、臨床の知による西洋科学の知の問い返しのプロセスを中心として展開していく。このプロセスは、実感によって現実を相対化することと言い換えることもできるが、



図5 物語の共有による再絶対化のプロセス



(安井理夫 2006 年)

ここでは、その実感がどういったものであり、どのように科学的な確かさをもっているのかを考察したい。

ジェンドリン (Gendlin, E. T.) は、体験が固定的なものではなく過程であること (体験過程 experiencing)<sup>14)</sup>、そしてそれが今をリアルに体験すること (実感の形成) にとって欠かすことのできないアイデアであることを指摘し、フォーカシング<sup>15)</sup> を考案した。これは、漠然とした暗々裡の感じを、胸のあたりの「からだの感じ」としてとらえ、それを感じつつ、ことばとの照合をていねいに繰り返しながら、ぴったりの表現をみつけていくための技法である。池見陽によれば、このようなフェルト・シフト (気づき) が起こると、からだがりラックスすることが科学的に証明されている<sup>16)</sup>。筆者も、利用者の表情や姿勢、声のトーンなどが明らかに変わることを体験している。つまり、実感そのものは主観的なものであるが、それを感じている状態は具体的な行動として観察が可能で、自然科学の基準や方法によって立証できると考えられる。池見は、それをもとにして、表1のような体験過程スケールを作成している (このような指標も、実感

表1 体験過程スケール（EXP スケール）の評定基準早見表

段階	評定基準の概要〈説明〉
1	◆自己関与が見られない。話は自己関与がない外的事象。
2	◆自己関与がある外的事象。◆～と思う、と考えるなどの感情を伴わない抽象的発言。〈～と思う、などの抽象的発言で感じに触れない〉
3	◆感情が表明されるが、それは外界への反応として語られ、状況に規定されている。〈感情表現は何かの対象に限定されている〉
4	◆感情は豊かに表現され、主題は外界よりも本人の感じ方や内面。〈感情は豊かに表現され、主題は何かの対象よりも、受けとめ方〉
5	◆感情が表現されたうえで、自己吟味、問題提起、仮説提起などが見られる。◆探索的な話し方が特徴である。〈「～かなぁ」という仮説〉
6	◆気持ちの背後にある前概念的な体験から、新しい側面への気づきが展開される。◆生き生きとした、自信をもった話し方や笑いなどが見られる。
7	◆気づきが応用され、人生のさまざまな局面に応用され、発展する。〈気づきが応用されていく〉

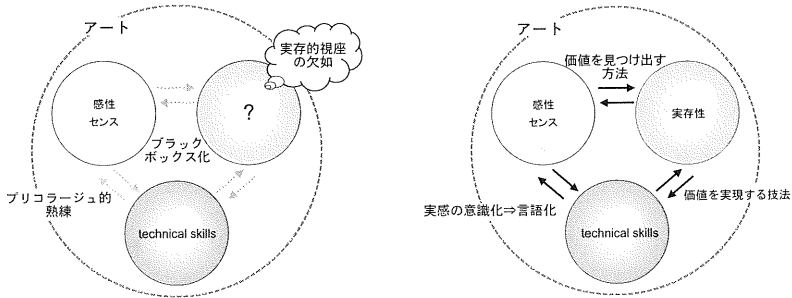
出典 池見陽編著『フォーカシングへの誘い 個人的成長と臨床に生かす「心の実感」』サイエンス社 1997年 15頁 の一部を省略して用いた

の科学的理解にとって有益なアイデアだと思われる)。

このことは、利用者だけではなく、支援者にもあてはまることである。アートや技術（勘や経験、感性といわれてきたもの）は、支援場面における実感として表れてくると考えられるので、支援者がとらえ返す（対自化する）ことが可能である。つまり、前述したような方法で実感を意識化することができれば、それにもとづいて知識化された技法としてのテクニカル・スキルを意識的に用いることが可能になり、その意味と目的を明確にできるだろう。図6はそのことを示したものである。

太田は、「実証方法の妥当性が、事実認識の正当性と交錯しているような現実」<sup>17)</sup>に警鐘を鳴らしているが、この「体験過程スケール」のアイデアは、実証方法の妥当性を示す指標として役立つと同時に、揺るぎない実感という事実認識の正当性を担保するものともなっている点を指摘しておきたい。実証研究で用いられる方法が、いわゆる研究のための研究ではなく、利用者に役立つものにもなっていることが、実存的視座からの科学的

図6 アートの意識化と支援科学としての方法



支援方法の確立にとって、いちばん重要なことだと考えたい。

### 3. 限界設定と実存性

#### (1) 本稿で用いる諸概念の整理

限界設定の技術について考察するまえに、本稿で用いようとしている枠組みを、知識、価値、方法、技法の4つに分類してまとめておきたい。

##### 〈知識〉

システム思考を用いて「構造—機能」としてとらえられた利用者の客観的現実としての生活を、生態学的視座にもとづいて理解された利用者の生活コスモスと照合し、その意味を問い返すという主体的参与によって、支援者と協働してフィードバックを行うプロセスが、ソーシャルワークに固有な方法である。

##### 〈価値〉

利用者は、個人としては絶対的な価値をもっているが、社会関係のなかでは、それぞれに相対化され、自律における限界を他者と分かち合う

存在である。したがって、他者や環境に対して、コンタクト（主体的なかかわり）をもち、それぞれが尊重されるような新しい関係性を共有する必要がある（社会的自律性）。また、その前提として、選択の主体としての利用者が自らの実感に応答し、選択の主体として責任のある生き方をする（自己実現）が必要である。

#### 〈方法〉

システム思考を用いて設計された支援ツールを用いて、利用者の生活を分析し、それをビジュアル化して利用者に示すことによって、利用者は、自らの生活を問い直し、実感と照合しながら、どのような生活をめざすのかをプランニングすることが容易になるだろう。そして、それを支援者やまわりの人たち、社会と分かち合う方法を探求していく技術が、ソーシャルワークには不可欠である。

#### 〈技法〉

利用者の生活や面接場面でのあり方は、まず、観察にもとづいた客観的な事実として認識されなければならない。そして、支援者と協働して、そうした所与の現実を主体的にコントロールできるようになっていくことが、利用者の効力感につながると考えられる。他方で、もし現実が変わらないとしても、それと向かい合い、自分にとっての意味をみつけだし、その意味を引き受けて生きていくことは、利用者の責任である。

以上のことを整理してみると、表2のようになるだろう。

### (2) 限界設定の意義

ムスターカス (Moustakas, C. E.) は、「限界はその関係の境域 (boundaries) をひき、その関係と現実 (reality) を結びつける。限界によって、子どもは、自分自身、セラピスト、プレイ・ルームに対する責任に気づくのである。それによって、安全が確保され、子どもは自由に、そ

支援関係における境界と限界設定の意義

表 2 エコシステム構想における概念の分類

構成要素	技術	西洋科学の知	臨床の知
知識 (理論の枠組み)	支援者	システム思考	生態学的視座
	利用者	客観的現実	生活コスモス
	支援関係	相互関係	主体的参与
	焦点	原因と結果 (過去→現在)	体験過程 (現在→未来)
	協働の課題	照合	
価値 (理念・目的)	支援者	相対化	絶対化
	利用者	社会的自律性	自己実現
	支援関係	権利の主体	選択の主体
	焦点	コンタクト	共生
	協働の課題	共有	
方法 (利用者理解)	支援者	支援ツールの設計	活用のための場面設定
	利用者	構造的理解	様式的理解
	支援関係	分析	実感形成
	焦点	スケーリング	物語
	協働の課題	フィードバック	
技法 (technical skills)	支援者	観察による確認	実感形成の促進
	利用者	知的な認識	生きられた認識 (体験)
	支援関係	効力感 (コントロール)	意味の発見
	焦点	所与の条件 (限界、制限、弱さ、脆さ)	責任性
	協働の課題	実存性	

(安井理夫 2007年)

して安全に遊べるのである。それによってプレイルームでの経験が生きた現実になるのである」<sup>18)</sup>と指摘している。

つまり、支援場面における限界設定は、利用者が生きている（または、生き抜かなければならない）現実そのものとして提供される支援の「構造」だと考えられる。限界は、現実存在としての人間の実存条件そのものとして、利用者と支援者のまえに立ち現れてくるのであり、それを設定することによって、利用者と支援者は、協働で向かい合うべき現実（境界）を共有することが可能になるのである。

たとえば、NHKのドラマにはつぎのようなシーンがある。落語家修業

中の主人公のB子は、好意を寄せている男性が他の女性とつきあっているのを知って、嫉妬心からいろんな場面で感情を抑えることができず、人間関係をぎすぎすしたものにしてしまっている。そんなとき、師匠は彼女にこう言うのである。「今ゆうたように、あんたの心のなかは、どろどろした真っ赤ないやあな気持ちでいっぱいや。けどなあ、それも修行や。どうしようもない思いを抱きながら、嫌な自分、醜い自分、まっすぐ見つめたり。そらしんどい、そら苦しい。けどな、その先に見えてくる何かあるはずや。そやって、人の気持ちがだんだんわかるようになる、やさしい気持ちが持てるようになる」<sup>19)</sup>。

また、自分だけではなく、相手（環境）と向き合い、共有できる物語を模索する作業も必要である。したがって、この台詞はつぎのように続いていく。「けどなあ、広い野原歩いてて、急に降ってくる夕立とちがうところは、話のできる相手やゆうことや。自分とよお向き合うたら、つぎは相手と向き合わんとな」<sup>20)</sup>。本稿では、限界設定の技術を、このように、自分自身の実感と環境の2つにしっかりと向き合えるような場や関係性を提供するための境界を明確化する技術として理解したい。

### (3) 実存性の内容

表3は、梶田叡一、鑪幹八郎、水島恵一がそれぞれQOLについて述べていることをまとめたものである。

一般的に、QOLは、I 経済的、II 身体的、III 精神的、IV 社会的または生きがい、という4つのレベルから述べられることが多い。しかし、この表の核心はレベルVからVIIにある。レベルIVにおける「認知」を転回点として、レベルVからVIIの視座からレベルIからIIIとIVの一部を問い返すという構造をもっていると考えられるからである。これは、本稿で述べている実存性に根ざした支援技術（システム思考によってとらえられた現実と利用者が向かい合い、臨床の知にもとづいた支援関係のなかでその意味を

支援関係における境界と限界設定の意義

表 3 QOL の 7 段階

レベル (梶田による (出典 1))	課題 (梶田による (出典 1))	実存的課題 (水島による (出典 2, 3))
I 貧しさ	人間らしい生活条件の獲得	境界の体験 (いかに自己実現を欲し、いかに人間的であろうとしても、その自分の足を引っ張り、束縛し、疎外する要因) 社会的な規定—抗しがたい外力など 生物学的な規定—不治の病など 心的装置論、行動療法 (刺激に対する反応) → 自覚的存在性への契機
II 病い	①健康を回復 ②身体的な苦痛からの解放	
III 不安、イライラ	①心理的な落ち着き ②これでいいのだという肯定感	
IV 無力感・受動性	①有能感、あるいは能動性の意識 ②自己効力感	防衛的、固定的な自我の束縛からの解放 個別的生命性を生かした新しい自我 動物性・本能のもつ血生臭さ、閉鎖集団性、利己性をも含めた人格の統合
V 虚無・倦怠	①生の充実感 ②意味感 ③歓喜	境界の体験、葛藤による構造の複雑化 葛藤、矛盾、病苦、弱さ、衰退、死などの受容 → 存在に根ざした自覚化、精神化 → 不可能は不可能であることを知ること、そしてその認識に立った上で、それを受け入れ、あるいはそれを個人的社会的に超克していく実存を自らに課すこと ・「自己に忠実に選択する」、「なすべきことをする」と表現される実存 → 生命的自己実現からも見放され、そしてそれに耐える実存的忍耐さえままならない、だらしなく喘ぎ喘ぎの実存の評価 ・「人に迷惑だけはかけない」、「ただ黙々と与えられたつとめを果たす」などと表現される実存
VI 世代性 (鐘による (出典 1))	もう一度世の中に帰って、そこでみんなと生きる喜び	自己と他者あるいは集団・人類・自然という規模において存在の系が成り立つこと 自他の矛盾、分離の事実をはっきりふまえながら、再統合の道を志向する実存としての愛
VII 精神的枠組みの変革	①大きな命の流れのなかでの「私」 ②意味そのもの ③自分はこういう意味での大きな流れのなかにいる	突然訪れる体験 (年齢や人格の成熟度などに関係なく) → 体験のあとの人生にかならずしも影響しない 受動的に大きな存在において生かされるという体験 超越境を実感できないときでも、なおかつそこに賭ける態度 → 人間の境界の自覚と深く関係している

注 レベル・課題の列の I～V および VII は梶田の提示した分類であり、VI はそれに対する鐘の修正意見である。その右側の実存的課題の列は水島の説を、梶田・鐘の分類にしたがって対応させた。この表における記述は、すべて引用であるが、それぞれの概念の対応関係は、筆者がまとめたものである。

出典 1 小花和昭介・奈倉道隆・宮本美沙子・柏木恵子・鐘幹八郎・梶田徹一「クオリティ オブ ライフの意味を問う」『人間性心理学研究』第 17 巻第 1 号 1999 年

2 水島恵一「人間性の諸相と実存」『人間性心理学研究』第 11 巻第 1 号 1993 年

3 水島恵一「人間の可能性と限界—真の自己を求めて」大日本図書 1994 年

(安井理夫 2004 年)

問い返すことによって、自分にふさわしいと実感できるような対処方法を見つけていく)とおなじ構造であるといえる。そして、問い返しのキーワードとして、限界、受動性、弱さ、脆さなどがあげられる点を指摘しておきたい。つまり、レベルⅣにおける認知こそが、利用者の実存性に迫る鍵になっていると考えられるのである。

これらの議論もふまえて考えると、実存性の内容として、つぎの3つをあげることができるだろう。

① 認知 (cognition)

私たちは、どう認知するかについて選択することができ、絶望的な状況であっても、それにもとづかずに(自然科学の基準とは別の基準で)生きることが出来る。

② 関係性 (relationship)

私たちは、(a)「わかってくれる人がいると強くなれる」(受動的)、あるいは(b)「守りたい人がいると強くなれる」(能動的)のであり、どのような関係性のなかで生きているかによって、強さは変化するのだといえる。

③ 状況 (situation)

「火事場の馬鹿力」といわれるように、ある特定の状況においては思いがけない力を発揮できることがある。ただし、こういった能力はふだんの生活では発揮されないので、状況に依存したものだといえることができるだろう。

つまり、私たちの能力は、認知、関係性、状況といったその人が生きているコンテキストによって変化するものとして理解されるべきである。このような利用者や支援者が生きているコンテキストを、本稿では実存性として理解したい。換言すれば、実存性とは、このような価値変換(図地反



転) が起こる現象学的場のことである。そして、支援関係におけるこのような場の構造化には、限界設定が不可欠だと考えられるのである。

#### 4. 限界設定の技法

##### (1) 境界 (boundary) を明確にするための技法

倉戸ヨシヤは、実存的・現象学的心理療法に分類されるゲシュタルト療法の立場から、「思い込みや空想にとられるのでもない。また、過去に生きるわけでもない。あるいは、未来にのみ夢をみるのでもない。取り入れ (introjection) や投射 (projection) をもたないで、現実をありのまま経験でき、現在、「今—ここ」に自分の基盤を置くというときに精神的健康性をもっているということができよう」<sup>21)</sup> と述べている。図7は、パールズ (Perls, F.) の考えにもとづいて、このような自己と環境の不適切な関係性をまとめたものである。

表4は、このことをふまえて、境界を明確にし、主体的なコンタクトを可能にするための「言い換え」の技法をまとめたものである。

##### ① 想像 対 事実

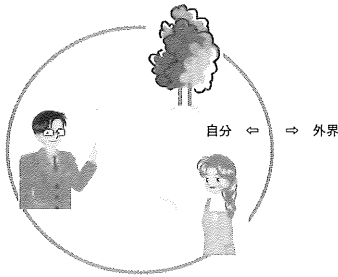
想像とは自分のなかの世界で起こっていることである。したがって、観察にもとづいて、具体的な事実 (まわりの環境や自分の行動など) を確認したうえで、この2つの境界を明確にしなければ、何にどう働きかければよいのかが明らかにならない。

##### ② 他律 対 自律

「私は～すべきである」は、他者の価値観や判断基準、期待などが取り入れられたものである。したがって、それらを一度客体化し、自分との境界を明確にしたうえで、選択し直さなければ主体的な選択とはいえ

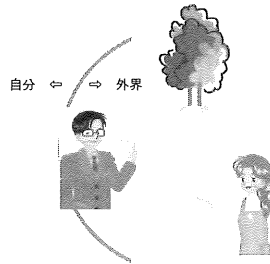
図7 自己と環境との不適切な関係性

イントロジェクション



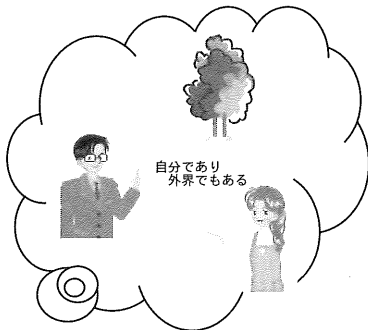
外界に帰すべき事柄を、自己の責任としてしまったり、異物との葛藤にエネルギーを費やすこと

プロジェクション



自分のなかに生じた想像や衝動、感情などを、自分のものとは認めず、外部に置き換えてしまったり、環境(他人)の責任にする傾向

コンフルエンス



自分自身と外界(他者)との境界を感じられないとき、あるいは自分と外界とがひとつであると感ずる状態

リトロフレクション



環境に働きかける代わりに、自分自身があらゆる行動の標的となる。自分の欲求を満たすためのエネルギーを、もう一方の自分自身に向けてしまう状態

注 この表における各概念の解説は、中西龍一「パウルズ著『ゲシュタルト療法』解題」倉戸ヨシヤ編『ゲシュタルト療法 現代のエスプリ 375』至文堂 1998年 48-49頁の記述を要約したものである。

(安井理夫 2007年)

表 4 言い換えによる明確化

①	イントロジェクション	想像 対 事実	私の想像によれば～ ⇒ 私の観察によれば～
		他律 対 自律	私は～すべきである。 ⇒ 私は～する方を選ぶ。
②	プロジェクション	受動性 対 主体性	私は～できません。 ⇒ 私は～する意志がありません。
③	コンフルエンス	コントロール 対 自律	そんなことをして楽しいですか。 ⇒ 私はそんなことをされて不愉快です。

注 この表の①と②は、倉戸ヨシヤがスティーブンス (Stevence, J.) による訓練技法として紹介しているものをまとめたもの (倉戸ヨシヤ『ゲシュタルト療法の人格論』輔関西カウンセリングセンター 1991年 96-107頁)、③は、倉戸が訓練の場面で用いていた技法を筆者が付け足したものである。

ない。

### ③ 受動性 対 主体性

「私は～することができません」という表現は、自分についての私の解釈 (または想像) であって、実体のあるリアルな私自身について述べられているわけではない。この表現を何度か繰り返すことで実感が生まれ、ほんとうに不可能なことなのか、それともやる意志がないだけなのかははっきりしてくる。つまり、主体である私自身がリアルになるので、結果的に、かかわるべき環境との境界が明確になる。

### ④ コントロール 対 自律 (疑問文を平叙文に)

「そんなことをして楽しいですか」の主語は「あなたは」である。話者の意図をもっと明確にすれば「あなたはだめなことをしている」ということになり、私とあなたのあいだに本来あるべき境界を強引に踏み越え、相手の主体性を無視して行動を断罪 (価値判断) していることになる。しかも、それがストレートではなく、「疑問文」(相手に問いかける) というかたちで婉曲に表現されている。

あるいは、その意図は、話者が、その行動をこころよく思っていないという自分の気持ちを察して (話者が依頼したというかたちではなく)、あくまでも相手が自主的にやめたということにしたいということかもしれない。もし、そうなら、(a)表向きは、話者はあくまでも客体であって、主体としては表に出てこない (話者の責任性が回避されている)、(b)逆

に裏では、主体は話者だけであって、相手の主体性（意志）は無視されている、という2つがこの言い方の特徴であると考えられる。

このように明確な意思表示をせずに、相手に考えさせて自分の意図どおりの行動を起こさせようとする表現を、コントロールと名づけておきたい。このような「コントロールする—コントロールされる」という関係性からの自由が自律であると考えたい。相手を主体として尊重しようとするれば、踏み越えてはならない境界が必ず存在しているはずだからである。

したがって、この場合は、疑問文を平叙文に言い換えることを通して、「私はそんなことをされて不愉快です」というふうに、私にとっての事実を情報として（相手についての価値判断ではなく）相手に伝えることができるように支援すべきだろう。

## (2) 適切なコンタクトと言い換えの技法

表5は、パールズが『ゲシュタルト療法』のなかであげている「5つの質問」<sup>22)</sup>をもとに、利用者が自分の実感にかかわっていくための技法をま

表5 実感形成のための質問の型

焦点	方 法	目 的
感じ	あなたは、今、何を感じていますか？	体験過程への注意の喚起
	・それは、どんな感じですか？	感じをことばにする
	・そのことばで、言えていないのはどんなことですか？	ことばと実感との照合
行動	あなたは、今、何をしていますか？	行動への注意の喚起
	・今、していることに気づいていますか？	行動へのコンタクトをうながす
	あなたは、今、何をしたいのですか？	行動と意図との照合
ためらい	あなたは、今、何を避けているのですか？	図にしたいくないことからへの注意の喚起
	あなたは、今、何を予想していますか？	予期される不安を感じてみる
	・今、何を恐れていますか？	予期される不安をことばにしてみる

注 下線で示したものは、パールズが『ゲシュタルト療法』において示した「5つの質問」である。

(安井理夫 2006 年)

とめたものである。

これらは、「今—ここ」という現象学的場において、(a)感じていること、(b)行動、(c)ためらいという3つの側面からコンタクトをもち、そのありようをありのままレポートすること（現象学的な記述）を通して図にしているための質問である。これらの技法の特徴は、前述したフォーカシングという「からだの感じ」だけではなく、さらに具体的に、利用者が実際に何をしているか、あるいはしていないかという「行動」にも関心を向け、それらを手がかりにして実感にかかわっていきこうとするところにある。

特に、「行動」の箇所にあげた3つの質問は、利用者が、前述したリトロフレーションに気づくのに有効だと考えられる。自分が意図していることとは異なった結果をもたらすような（自分自身でその実現を妨害するような）行動をしていたり<sup>23)</sup>、境界が不明確または不適切な場合、効果的に環境に働きかけていくことができないし<sup>24)</sup>、そのような不適切な対処に紛れてしまって自分の実感と向きあうこともできないと考えられるからである。

### (3) まとめと今後の課題

今まで述べてきたように、私たちが、適切な対処方法を見つけ出していくためには、自分や環境との境界が明確になるような場の構造化が不可欠である。そのためには、「今—ここで」起こっていることを、過去にさかのぼって時系列で構成し直して（解釈して）も役には立たない。前述したように、体験過程にリアルタイムで向き合い、(a)自らの感受性に応答し、自分の行動に直面すること、(b)環境に向き合うこと、の2つが必要なのである。

つまり、(a)利用者が自分自身の実存的な価値基準を信頼して生活できるようになること（自己実現）と、(b)自分の実感と環境の両方に適切なコンタクトをもち、それらに責任のある応答ができること（社会的自律性）の

2つをめざした個別的な価値の認識様式（Human Criteria）<sup>25)</sup>を明らかにするためには、限界設定の技術が不可欠だと考えられるのである。これは、換言すれば、限界設定の技術をもたない利用者中心の支援は存在しないということでもある。

わが国においても、質の高いサービスや相談を行っている機関や事業所は少なくないだろう。しかし、今回の法改定を契機として、ソーシャルワークを、制度の効果的な運用のための技術ではなく、それを手段とした利用者中心の支援技術として再認識しなければ、「現場で役に立つ」、「科学的」、「根拠のある」という美名のもとに、ソーシャルワークがわが国から消えていく危険が現実のものとなってきていると考えられる。

したがって、ソーシャルワークの支援技術を、サービスを提供する際の利用者への「接客態度」としてではなく、本来の実存性にかかわっていくための技術として私たちの手に取りもどすためのメルクマールとして、限界設定の技術を位置づけたい。そして、本稿で示した支援技術の有用性を実践のなかで検証していくことを今度の課題としたい。

#### 注

- 1) 拙論「エコシステム構想における支援技術 — 実存的視座と Human Criteria の意義 —」関西福祉科学大学大学院博士後期課程学位申請論文 2007年
- 2) フレデリック・G・リーマー著 秋山智久監訳『ソーシャルワークの価値と倫理』中央法規 2001年 8頁
- 3) ティリッヒ／大木英夫訳「生きる勇気」『ティリッヒ著作集第9巻 存在と意味』白水社 1978年 136-137頁には、「かぎりなく具体的であるような現実に対してこのような（完全に客観的な認識の）方法を適用することは、きわめて不適切である。もしも人格的自己が計算や操作の事柄と化してしまうならば、それはもはや人格的自己であることをやめてしまう。……人格的自己が何かを知るためには、われわれはその自己に参与せねばならないのである。しかし参与することによって、われわれはそれに変化を加えている。あらゆる実存的認識においては、主観と客観の両方がそのままに実存的認識の行為そのものによって変貌せしめられる。実存的認識は、そこにおいて何か新しい意味が創出され

かつ承認されるところの出会いに基づいているのである」( )内の語句は筆者が補った」と述べられている。

- 4) たとえば、福祉士養成講座編集委員会編『社会福祉援助技術論 I 第3版』中央法規出版 2006年、新版・社会福祉学習双書編集委員会編『社会福祉援助技術論』全国社会福祉協議会出版部 2007年、北島英治／白澤政和／米本秀仁編著『社会福祉援助技術論(上)』ミネルヴァ書房 2007年、などを参照
- 5) 岡本民夫「専門援助技術をめぐるわが国および諸外国の動向と課題」久保絃章・佐藤豊道・川延宗之編著『社会福祉援助技術論【上】』川島書店 2004年 294頁
- 6) 拙論 前掲論文 22頁
- 7) 秋山薊二「アートとしての援助技法」太田義弘・秋山薊二編著『ジェネラル・ソーシャルワーク』光生館 1999年 140頁
- 8) 太田義弘「支援過程の意義と目的」太田義弘・中村佐織・石倉宏和編著『ソーシャルワークと生活支援方法のトレーニング 利用者参加へのコンピュータ支援』中央法規 2005年 87頁
- 9) 西洋科学の知と臨床の知については中村雄二郎『臨床の知とは何か』岩波新書 1992年 129-136頁を参照
- 10) 同書 9頁
- 11) 太田義弘「支援科学としてのソーシャルワーク実践と方法」『ソーシャルワーク研究』Vol. 28 No. 2 2002年 37頁
- 12) 同論文 35頁
- 13) 同論文 37頁
- 14) E. T. ジェンドリン、池見陽／池見陽、村瀬孝雄訳『セラピープロセスの小さな一歩 フォーカシングからの人間理解』金剛出版 1999年 などを参照
- 15) E. T. ジェンドリン／村山正治・都留春夫・村瀬孝雄訳『フォーカシング』福村出版 1982年 などを参照
- 16) たとえば池見陽『心のメッセージを聴く 実感が語る心理学』講談社現代新書 1995年 26頁および102頁 などを参照
- 17) 太田義弘『ソーシャル・ワーク実践とエコシステム』誠信書房 1992年 244頁
- 18) クラーク E. ムスターカス／古屋健治訳『児童の心理療法』岩崎学術出版社 1968年 12頁
- 19) NHK ドラマ『ちりとてちん』2007/12/14 放映分
- 20) 同ドラマ
- 21) 倉戸ヨシヤ『ゲシュタルトセラピーの人格論』(財)関西カウンセリングセンター

1991年 130頁

- 22) F. S. パールズ／倉戸ヨシヤ監訳『ゲシュタルト療法 ― その理論と実際 ―』ナカニシヤ出版 1990年 89頁
- 23) このような現象を、ゲシュタルト療法では「自己妨害」と呼んでいる（F. S. パールズ 前掲書 68-69頁および83-84頁を参照）。同書84頁には、「我々が知るべき、また、扱うべき問題は、クライアントの自己妨害がいかにしてなされるかということであって、決してフロイトが考えたような『妨害の原因』、すなわち妨害がなぜ起こるか、ということではない。……我々はその所にそれ自体を表わしている、外に表われている現象そのものを扱うのだということである。……クライアントが自分で自分自身を妨害しているやり方に気づけば気づくほど、必然的に、自分が何を押さえようとしているのかに気づくものである。……妨害、押さえ込みそのものに集中することによって、クライアントは自分が自分自身を押さえ込んでいるという事実と、何を押さえ込んでいるのかということに気づいていくわけである」と述べられている。
- 24) 境界が明確ではないということは、「コンタクトする接点が認知」できない（F. S. パールズ 前掲書 40頁）ということである。
- 25) 拙論 前掲論文 115頁

（本学准教授・ソーシャルワーク論）